



# しびき



## CONTENTS

|                   |              |             |             |           |
|-------------------|--------------|-------------|-------------|-----------|
| 8                 | 6            | 5           | 4           | 1         |
| 2019年(1月~12月)出荷実績 | AOSD国際会議開催報告 | ICDM役員会開催報告 | AOSD役員会開催報告 | 令和2年賀詞交歓会 |



ドラム缶工業会 藤井清澄理事長

# 賀詞交歓会

1月15日(水)午後5時半から、鉄鋼会館(東京都中央区)で、令和初となるドラム缶工業会の賀詞交歓会が開催されました。会員企業21社をはじめ、来賓及び関係団体などから141名が参加しました。冒頭、挨拶に立った藤井清澄理事長[日鉄ドラム(株)社長]は、本年の課題や活動について次のように述べました。

新年明けましておめでとうございます。

本日は後ほど駆けつけていただきます、経済産業省製造産業局金属課の蓮井智哉課長をはじめ、多くのご来賓の方々、会員各社、関係団体の皆様にご出席を賜りまして、心より感謝いたします。新年にあたり一言ご挨拶をさせていただきます。

先日、今年のカレンダーを見ていくつか気づいたことがありました。それは、休日の配置に変化が生じていることです。1つは、令和になり新しく2月23日が天皇誕生日になりました。2つめは、7月23日(木)が「海の日」、翌24日(金)に「体育の日」改め「スポーツの日」が並べられ、土日を合わせると4連休となっております。これは言うまでもなく7月24日(金)に開催されます東京オリンピックの開会式に合わせたものです。

3つめは、「山の日」が本来の日から1日繰り上げられて8月10日(月)となっております。こちらは前日に行われる閉会式に合わせたものだそうです。オリンピック期間中には1,500万人とも言われる訪日客がお越しになるという試算があるようで、少しでも混雑を緩和しようという目的から『2020年限定』の暦になっているようです。

日本のカレンダーには載っていませんが、11月3日には、米国の大統領選挙がございます。2016年に世界中が驚いたトランプ政権が発足して早4年が経過しました。そして今回、再選を果たすのか、世界中が注目しているところであります。

また国内に目を向けますと、いよいよ第5世代移動通信システム、いわゆる『5G』の本格運用も始まります。これにより我々の生活や社会環境の利便性が大きく変化・向上することが期待されます。

このように、2020年は例年になく大きなイベントが目白押しですが、一方で我々の事業環境が一体どうなるのか?、大変不明瞭であります。GDPを見ますと2018年10~12月期から昨年7~9月期までの4四半期は連続でプラス成長が続いています。ただその成長率は米中の貿易摩擦の継続するなかで漸減しております。昨年の成長率は2019年1~3月が2.6%、4~6月2.0%、7~9月1.8%、残念ながら消費税増税前の駆け込み需要の反動が加わった10~12月はマイナス3.6%と大きな落ち込みが見込まれています。

このように不透明感が強まるなかで迎えた2020年ですが、年明け以降、米中貿易摩擦の動向、年始以降急激に高まっている中東情勢の緊迫化、英国のEU離脱、日韓問題、北朝鮮情勢など政治的な変動要素が大きく、実体経済に影響を与え、見通すのが難しい状況が続いています。

当工業会を顧みますと、残念ながら2019暦年は200L鋼製ドラム缶、鋼製パール缶ともに対前年比マイナス4%弱の減少となりました。振り返りますと2017、2018年の2年間は、中国向けの間接輸出の活況により、久方ぶりの高生産に沸いたわけですが、2019年は1年間を通してこの要素が剥落しました。ただ絶対値を見ますと例えば、2019年暦年のドラム缶の出荷本数は1,360万本でした。これは増産が始まる前のレベルに戻ったということであり、大きく悲観する必要はないと思います。

2020年は、急速に回復する要素もありますが、また今以上に大きく減少をすることとも考えにくいと思います。おそろしくリーマンショック以降の平均レベル前後で推移するのではないのでしょうか。

一方で昨年申しましたが過去から続いている懸念材料は依然存在しております。1つは米国のシェールガス由来のエチレン生産能力の急速な増強です。2018、2019年の2年間で北米では800万tというシェールガス由来のエチレン生産能力が立ち上がっております。これは日本が年間に生産するエチレン生産能力650万tを大きく上回る新設設備となり、この影響がどう生じるのか注視が必要だと思えます。

2つめは、国内の化学産業における設備の老朽化という課題もあります。2022年には国内の主たるエチレンセンターの約50%が建設後約50年を迎え、更新時期に入ることです。これに対して各化学メーカーがどのように対応するのか、当業界が大きな影響を受けることもあり得ますので、こちらも注視が必要となるでしょう。

このような環境が想定されるなか、当工業会といたしましては、以下のような観点から会員各社に対するサポートを続けていこうと考えています。まず第一に、鋼製ドラム缶、鋼製パール缶の製品としての評価を高めるために、各種の機会を通じて広く社会にアピールし、認知度を向上させていく活動を強化、継続いたします。昨年は、ドラム缶のお客様向けに、ドラム缶取扱上の注意事項をまとめたパンフレットの内容の一部見直し、イラストなども加えてよりわかりやすくして再発行しました。

今年は、お客様のなかでの導入教育用の小冊子を新たに発行する予定です。これさえあれば簡単にドラム缶の何たるかがわかる平易な冊子を目指して取り組んでいます。また、パール缶についても、危険物収納時の缶種の選択をわかりやすく示したパンフレットを作成中です。

第二に国際活動の強化、継続を図ります。日本が会長職を務めます、アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会(AOSD)は、3年に一度国際会議を開いており、昨年10月には中国蘇州で第10回を開催しました。

“Environmental Protection and Social Responsibility”をテーマとして、16カ国から350人以上が参加、7件の統計報告と20件の技術発表が行われ、過去最大規模の盛会となりました。次回は2022年に韓国で開催予定です。

2017年にはドラム缶のJIS改定を実施しました。今年は25年振りにパール缶のJIS改定に取り組んでいます。この間に起こった市場の変化を取り込み、現状の実態に見合ったものにしようと鋭意作業を進めております。

安全とコンプライアンスについてですが、これはあらゆる活動の大前提であります。当工業会におきましても、安全委員会での会員各社の災害事例の交換・分析や各社での類似災害事例検討会などの地道な活動の継続、コンプライアンス研修会の開催などを通じて、会員各社個別の努力を側面からサポートしてまいります。

本年はねずみ年です。植物に例えると成長に向かって種子が膨らみ始める時期であり、未来への大いなる可能性を秘めた年だそうです。株式市場にも「子年は繁栄」という格言があるそうです。この子年にあやかって我々も将来の新たな成長に向けて種を膨らませてまいりましょう。

最後になりましたが、本年がご列席の皆様及び、ご家族、そして当工業会にとって実り多い一年となりますことを祈念し、私の年頭のご挨拶といたします。ご清聴ありがとうございました。

**続いて、那須七信副理事長 [JFEコンテナ(株)社長] が、「今年はオリンピックイヤーということでインバウンド関連だけでなく、我々製造業にも何かしら恩恵があれば良いなあと期待感がございます。しかし残念ながら、昨年から引き続いている米中貿易摩擦問題は予断を許さない状況にあり、さらには年始早々米国とイランの間で緊張が高まり、株価が乱高下するなど波乱の幕開けとなりました。そういう状況下ですから、懸念材料も含め景気の先行きに不透明感や不安感は拭えません。それでも我々は一喜一憂せず、初心を忘れずにドラム缶、パール缶を愚直に作り、前に進んでいくしかございません。**

今年はねずみ年でございます。ねずみには「ネズミ算」や「ネズミ講」に例えられるように「増える増える」というイメージがあるようです。運を天に任せる訳ではありませんが、これに期待をして会員の皆様と共に明るく元気よく前向きに頑張っていきたいと思えます。

もう一つ、安全について話をさせていただきます。昨年も各社で休業災害、不休災害が散見されました。原因を分析すると条件設定が不足しているものや不注意に



ドラム缶工業会 那須七信副理事長  
[JFEコンテナ(株)社長]

よるものが大半でした。我々の製造現場は作業従事者と設備機器が近接しており、怪我のリスクが大変高いです。是非とも今年は一人の怪我人もださないように、安全は全てに優先するという徹底をいただいて、災害パーフェクトゼロを目指した取り組みを各社にお願いしたいと思います。安全活動に終わりはございません、皆様よろしく願いいたします」と挨拶し、乾杯の発声後に歓談に移り、活発な意見交換などが行われました。

**歓談の途中、経済産業省製造産業局金属課の蓮井智哉課長から来賓を代表して、ご祝辞をいただきました。**



蓮井智哉課長  
【経済産業省製造産業局金属課】

明けましておめでとうございます。令和初めての新年を迎えるにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。まず初めに昨年の台風15号、19号など、被災された全ての皆様にお見舞いを申し上げます。また、ドラム缶工業会をはじめ、産業界の皆様には、被災地支援に様々な御協力をいただき、改めて感謝申し上げます。さて、日本の製造業につきましてはバブル崩壊、リーマンショック、自然災害など平成の時代には数多くの困難に直面してきましたが、その都度ドラム缶に救われてきました。東日本大震災や一昨年の西日本豪雨などでは、ドラム缶の利便性と有用性が評価され重宝されたと伺っております。なかには無償提供いただいたものもあり、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。一方で、足下では海外経済の減速や、ユーザーニーズの多様化、数多くのチャレンジが待ち受けていますが、日本の金属産業は必ずやこれらの課題にも十分に対応し、ますます発展していけると信じております。

喫緊の課題として、米中貿易摩擦、中東の緊張など不透明感が高まっております。そのなかでいかに安定かつルールに基づいた公正な取引貿易が行えるかが重要であります。日EU経済連携協定(EPA)、TPP11協定(環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定)や1月1日に発効しました日米貿易協定を通じて、これからも自由で公正なルールに基づく国際経済体制づくりに努力していきたいと思っております。

鉄鋼業界においては、世界の過剰生産能力が依然として大きな課題だと思っております。昨年の鉄鋼グローバル・フォーラムの結果を受け、多国間での枠組みに加え、並行して二国間の鉄鋼対話も強化していきます。

一方でAI、IoTなどデジタル経済の急激な進展への対応も欠かせません。これらは街づくりにも活用され、スマートシティ、スーパーシティなどの取り組みも進んでおります。

さらには今年、5Gなど、デジタル化の動きが一層加速していきます。こうした取り組みが日本経済の需要喚起につながり、皆様のお仕事にお役立ちできるよう税制や法案などを国会へ提出する予定でございます。

一方で環境問題であります。御承知の通り、ドラム缶はリユース、リサイクルが確立されており、循環型社会の構築に貢献をいただいております。弊省としましても引き続き官民一体となって循環型社会の実現に向けて努力をしていきたいと考えております。

一方サプライチェーンの適正化ということで、取引適正化についても働き方改革に伴う「しわ寄せの防止」を中心に取り組みを進めております。

金属業界におかれましても金属産業取引適正化ガイドラインを踏まえて自主行動計画などの策定を進めていることを認識しております。本年もさらに取引適正化を進化させ議論を深めていきたいと思っております。

そして経済活動の前提として何よりも「安全」が大事だと思います。すでに金属業界から多くの団体に「製造業安全対策官民協議会」にご参画いただいておりますが、皆様には今年も引き続き安全対策をより一層進めていただくことを切にお願いいたします。

今年、東京オリンピック・パラリンピックがいよいよ開幕します。オリンピック・パラリンピック開催を契機に日本経済が盛り上がり、ひいてはドラム缶工業会の皆様の発展につながり、今年一年が良い年になるよう心より祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

**中締めでは、金子賢三副理事長[新邦工業(株)社長]が**

「経済産業省製造産業局金属課の蓮井智哉課長をはじめ多くの来賓の方にお越しいただき、本年も賀詞交歓換会が盛大に開催できて本当に感謝しております。先ほどの副理事長の挨拶に今年「ねずみ年」で「景気が増す」という話があり



ドラム缶工業会 金子賢三副理事長  
【新邦工業(株)社長】

ましたが、実は私は昭和23年4月2日生まれ72歳のねずみ年です。皆さんと一緒に年男の名を汚さず「景気が増す」よう一層頑張りたいと思っております。さて名残惜しいですが、ここで中締めの挨拶をしたいと思います。本日ご列席の皆様とその家族のご健勝と会員企業の発展を祈念して三本締めで締めたと思います」と挨拶し、参加者全員で三本締めを行いました。



ドラム缶工業会  
常務理事 事務局長  
坂元 信之

# AOSD 役員会を開催しました



昨年は、蘇州でのAOSD国際会議（記事6～7ページに掲載）に先立ち、前日の10月14日にはAOSD役員会を開催しました。

現在、AOSD役員は下表のアジアの5カ国（日本、中国、インド、韓国、タイ）で構成されています。AOSDは毎年役員会を開催し、各地域の統計ならびに共通の利害を有する技術的な課題について意見交換を行っています。

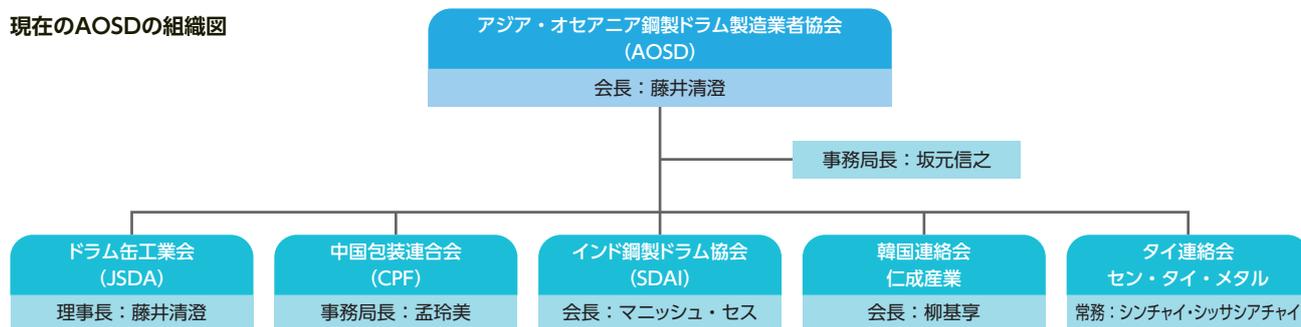
今回の役員会は、翌日から行われる国際会議のプログラムの最終確認とともに、2022年の国際会議は韓国で開催することを決定しました。その中で、AOSD役員会ならびに国際会議の目的、運営方法、頻度、予算等について話し合われました。なお、AOSDの目的は会則第2条で以下のように定めています。

[但し、3)の意見交換には販売価格、製造コスト、販売地域、顧客等の競争に関わる情報等は含まれません。]

当協会の目的は、アジア・オセアニア地域の製造業者間の協力関係を促進すると同時に、以下の活動を行うことにある。

- 1) 鋼製ドラム及びペールに関する調査、研究、情報交換
- 2) アジア・オセアニア地域での国際会議の開催
- 3) 共通の利害を持つ問題に関し、鋼製ドラム及びペール製造業者間の活発な意見交換を促進する。
- 4) 国際鋼製ドラム製造業者連合会 (ICDM) が主催する国際会議に於いて、アジア・オセアニア地域の製造業者にとって共通の利害を有する問題に関する共同提案を提出する。
- 5) 会員相互の緊密な関係を促進し、また会員共通の利益を広く外部に知らせる。

## 現在のAOSDの組織図

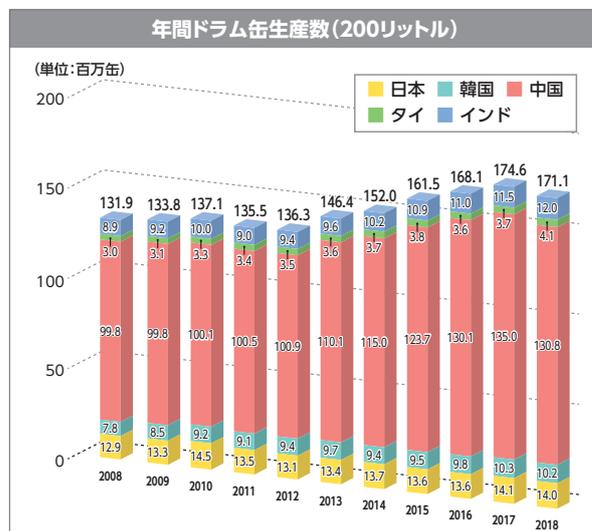


## 国際会議の開催履歴

|                    |                  |                   |                |                  |
|--------------------|------------------|-------------------|----------------|------------------|
| 第1回 1991年7月 東京     | 第5回 2004年5月 北京   | 第3回 1998年2月 ムンバイ  | 第4回 2001年4月 慶州 | 第8回 2013年11月 パタヤ |
| 第7回 2010年9月 福岡     | 第10回 2019年10月 蘇州 | 第9回 2016年11月 ムンバイ | 第11回 2022年 TBA |                  |
| 第2回 1994年 シンガポール   |                  |                   |                |                  |
| 第6回 2007年 クアラルンプール |                  |                   |                |                  |



日本、中国、インド、韓国、タイのドラム缶業界のリーダー



# ICDM 役員会を開催しました

10月のAOSDに続き、11月18日には米国、欧州、アジアの3地域の鋼製ドラム缶製造業者の工業会で構成される国際鋼製ドラム製造業者連合会 (ICDM) の2019年の役員会が米国ハワイで開催されました。ICDMにはドラム缶工業会 (JSDA) がアジア (AOSD) の代表として参加しています。

米国の鋼製新缶製造は現在6社24工場で、鋼製新缶の生産は微増傾向となっています。また産業用容器全体の中ではIBCも伸びていると報告されましたが、鋼製新缶のPR活動では次世代の企業経営者やバイヤーへは地球環境に関連づけることが有効であり、またデジタル世代への訴求にはメーリングリストでの情報配信や、YouTube、Twitter、LinkedIn等のSNSの活用を力を入れていると報告されました。

【ICDMの鋼製新缶の生産統計】単位:百万缶

|       | 米国 (ISDI) | 欧州 (SEFA) | アジア (AOSD) | アジア   |      |
|-------|-----------|-----------|------------|-------|------|
|       |           |           |            | 中国    | 日本   |
| 2005年 | 24.8      | 35.9      | 100.4      | 70.0  | 15.0 |
| 2008年 | 22.6      | 33.8      | 131.9      | 99.2  | 12.9 |
| 2012年 | 26.4      | 29.6      | 136.3      | 100.9 | 13.1 |
| 2016年 | 25.4      | 30.7      | 168.1      | 130.1 | 13.6 |
| 2017年 | 26.6      | 32.2      | 174.6      | 135.0 | 14.1 |
| 2018年 | 28.6      | 31.6      | 171.1      | 130.8 | 14.0 |

欧州は11カ国で29社が鋼製新缶を製造しています。2005年には12カ国39社あったので会社数は漸減しています。同様に生産も一時期減少しましたがここに来て下げ止まっています。欧州ではIBCでの危険物輸送の規制強化、また産業用容器全体に対するプラスチックリサイクルの強化とリサイクル時のスチールとのコスト差の議論で鋼製が圧倒的に有利であると報告されています。米国同様にユーザーへのPR活動に力を入れており、新缶ドラムの外観評価に関するユーザー向けパンフレットを作成中です。また鋼製ドラムとしては世界3地域の中で最も軽量化が進んでいることが報告されました。

アジア (AOSD) の生産はやはり中国の存在が圧倒的です。その中で日本の鋼製新缶製造 (200リットル) は現在7社17工場です。昨年2月に発行した新パンフレット「鋼製ドラムの取扱上の注意」には米国・欧州とも大きな関心を示しています。また日本からは、2017年に鋼製ドラム缶のJISを改正したことでISOの当該項目への改正提案を行っていくことを報告しました。

ICDMのスタビング会長からは、産業用容器において環境問題を見据えた鋼製ドラムの優位性のアピールは世界共通の課題であり、足並みを揃えて推進していきたいとの提案がされ、3地域の事務局長が方案を早急に検討をすることになりました。

## ICDMの組織図





# AOSD 国際会議を開催しました



去る10月15日から17日の3日間に中国の蘇州市でAOSD国際会議を開催しました。AOSD国際会議は1991年に第1回が東京で開催され、その後AOSD各国が持ち回りで3年に1度開催してきており、今回は第10回となりました。

今回は、テーマを「環境保護とドラム缶の社会的使命」とし、16カ国から306人が参加する過去最大の規模となりました。最初の2日間で統計発表が7件、技術発表が20件行われ、3日目は蘇州市近郊のドラム缶メーカーならびに機械メーカーを3カ所見学しました。会議場の入り口には20の展示ブースが設営され、中国、インド、タイのドラム缶メーカー、機械メーカー、素材サプライヤーの展示説明も行われました。

以下はそのプログラムの概要です。

## 1. 開会および来賓挨拶ならびに独禁法の遵守

AOSD 藤井会長（兼ドラム缶工業会理事長）、中国包装連合会（CPF）王躍中常務副会長兼秘書長、蘇州市工業情報局石志偉処長、米国ドラム缶工業会（ISDI）スタビッグ会長、欧州ドラム缶工業会（SEFA）リナルディニ副会長、坂元事務局長（独禁法の遵守について）

## 2. マーケット概況、地域別生産統計の報告

米国、欧州、日本、インド、中国、ならびにICDM（米・欧・アジアの工業会役員会）

## 3. 技術発表

### 1) 鋼製ドラム製造における環境対策

- ① 韓国の環境対策: Insung社の重金属フリー化、水性塗料の採用、塗装焼き付け温度見直しによるLNG削減、シンナー回収設備導入、照明電力の削減。
- ② 中国のVOC排出規制強化にともなう削減対策: 製造ライン各所のVOC排出源の分析と抑制対策（活性炭法、CO法、RTO法）、大半を占める小規模工場での対策。
- ③ インドの環境対策と社会的使命: クロムフリー化、水溶性塗料の採用、ビスフェノールAフリー化、VOC削減と低温乾燥炉、3相インバーター化、天然ガスによる二酸化炭素削減。また国内物流インフラ改善で更生缶のサプライチェーンを確立しつつある。

性塗料の採用、ビスフェノールAフリー化、VOC削減と低温乾燥炉、3相インバーター化、天然ガスによる二酸化炭素削減。また国内物流インフラ改善で更生缶のサプライチェーンを確立しつつある。

- ④ 外面塗装の作業環境改善: 東邦シートフレームが有機溶剤による健康被害防止にトルエン、キシレンフリー塗料を採用。色により異なる有機溶剤フリー塗料の開発を働きかけている。

### 2) 塗装技術、ヘリウムリークテスター技術、パール缶

- ① 表面処理液のフッ素フリー化: 東京ドラムはフッ素フリー薬剤を硝酸増量で探索し、リン酸亜鉛系、リン酸鉄系ともに薬剤の開発、最適条件の設定に成功した。
- ② ヘリウムリークテスター技術: 上海 Size Test & Control Technology社の技術説明。処理速度、最小検出リーク、コスト削減で、40以上の特許と300基以上の納入実績あり。
- ③ 縦型外面塗装設備: JFEコンテナは従来の横型設備から縦型への更新により、変形やキズ防止、塗膜厚のばらつき低下で塗料原単位を削減、生産能力アップを達成。
- ④ 鋼製パールの特徴とJIS: 長尾製缶所から、剛性による安全性、金属印刷による外観美麗、積み重ねによる省スペース、再使用・再利用と、JISの有効性を説明。

### 3) ドラム缶製造設備、新技術の開発

- ① 21世紀の溶接技術: ベルギー Arplas社の高速溶接、溶接制御Synchron ACによる電流制御、節電・摩耗レス・速度制御・駆動モータ・電極材質変更等による品質向上とコストダウン。
- ② 発展するドラム製造設備: 中国 Fivestar社の全自動溶接機、天地板・胴板のブランクライン、プラニッシャー、シーマー、リークテスター、栓締め機等の新型製品の紹介。
- ③ ドラム胴体加工: ベルギー Merco社の縦型胴体成型・天地板加工ラインの紹介（800本/Hr）、組み立て全ラインを3日間で更新可能、5G技術の応用。
- ④ 環境にやさしい高速生産ライン: 中国 管口北方製桶設備技術社の高速天地板絞り、可変周波数自動シーム溶接、溶接ビード圧延、塗装コンベア、縦型成型ラインと設備の信頼性。



会議場の様子



技術発表者20名と藤井会長および中国CPFの鞠理事



#### 4) ドラム製造における環境保護

- ① 水性塗料の適用: 環境規制の強化と水性塗料のニーズ。中国包装連合会 (CPF) 主導で技術標準を設定。常温での2色塗装等で、多くの会社が水性塗料への変更が可能となった。
- ② 排水の水質自動分析装置: 日鉄ドラムは水質自動分析装置を導入し、濃度規制化学物質の測定時間の圧倒的な短縮、測定頻度の大幅なアップとともに作業者の合理化を達成。
- ③ 水性塗料の排水処理: 中国 Foshan Qingdaofu 社の新しい処理技術 (Ash Man 処理プロセス) の紹介。水性塗料と排水処理は塗装産業における今後10年の最大の課題。
- ④ 樹脂プラグの最適化: JSDA 技術委員会は4種類の樹脂プラグの密閉性を水平落下、プラグ圧縮、変形FEM解析で評価。密閉性はプラグ形状ではなく樹脂の延性によることを報告。
- ⑤ 可溶性プラグの重要性: 米国 Tri-Sure 社の製品紹介。2015年天津港での爆発事故、火災事例からナイロンプラグの安全性、可溶性プラグの耐衝撃性を説明。
- ⑥ シーリング・コンパウンド: ヘンケル社による各種シーリング化合物の特徴と最適なライニング技術の重要性の紹介。

#### 5) 更生缶の経済性

- ① 持続可能社会と鉄の役割: East India Drum & Barrel 社によるプラスチックに対する鉄の優位性の説明。インドはプラスチックのシングルユースを2022年までに全廃することを決定。

- ② 国と人に優しい更生ドラム: 中国では9千万本の新缶が廃棄される。再生利用時の湿式処理は爆発事故や排水処理に問題があり、今後は環境にやさしい乾式処理で対応。

#### 4. 参加者の所感

##### 1) ドラム缶工業会 (JSDA) 木原技術委員長

各国のドラム缶業界の熱気を大いに感じる大会であった。特に、世界最大のドラム缶市場である中国の環境規制への取り組みは興味深いものであった。今後はさらに加速されるであろう業界を挙げての環境対応を注視していきたい。

##### 2) 中国包装連合会 (CPF) 王躍中副会長

CPFは中国政府評議会の下で運営されている。大成功に終わった国際会議をホストできたことは本当に光栄であった。中国はドラム缶の生産大国になったが、今回の環境対策での国際交流を踏まえ、中国国内への鋼製ドラムの普及を益々進めていきたい。

##### 3) 米国工業会 (ISDI) スタビッツ会長

今や、AOSD国際会議は世界ドラム缶の製造業者が集まる唯一で最大の場になった。テーマを環境問題としたことが今回の大きな成功であった。今後、更なる環境規制強化の中でAOSDの役割はますます高まっていくだろう。

##### 4) 欧州工業会 (SEFA) リナルディニ副会長

これまで何度もAOSD国際会議に出席したが、今回は全ての地域の参加者が同一のテーマに沿って話し合った初めての大会であった。発表者全員がCircular Economy (循環型経済)を意識したものであり、参加者全員にとり極めて有意義であった。



参加者全員での記念撮影

# 2019年(1月~12月)出荷実績

2019年の200L缶の出荷は、前年に比べ3.7%減、527千本減の13,606千本となりました。

用途別では、前年に比べ化学向け(4.6%減、513千本減)、石油向け(0.7%減、13千本減)、食料品向け(8.4%減、20千本減)が減少し、塗料向け(0.2%増、2千本増)、その他向け(9.5%増、17千本増)が増加しました。

ペール缶は前年比3.9%減の18,776千本、中小型缶は同2.1%増の504千本となりました。

## 2019年度缶種別・用途別出荷実績

| 缶種      | 2019年実績    |            |                  |                  |                |               |                |
|---------|------------|------------|------------------|------------------|----------------|---------------|----------------|
|         | 本数<br>(千本) | 前年比<br>(%) | 用途別〔本数(千本)〕      |                  |                |               |                |
|         |            |            | 石油               | 化学               | 塗料             | 食料品           | その他            |
| 200L缶   | 13,606     | 96.3       | 1,878<br>(99.3)  | 10,577<br>(95.4) | 741<br>(100.2) | 218<br>(91.6) | 192<br>(109.5) |
| ペール缶    | 18,776     | 96.1       | 10,108<br>(98.9) | 7,589<br>(92.1)  | 510<br>(91.8)  | 0             | 569<br>(110.2) |
| 中小型缶    | 504        | 102.1      | 1                | 483              | 5              | 0             | 14             |
| 亜鉛鉄板缶   | 419        | 108.6      | 0                | 407              | 5              | 3             | 5              |
| ステンレス缶  | 33         | 84.6       | 0                | 32               | 0              | 0             | 0              |
| 合計      | 33,337     | —          | 11,986           | 19,088           | 1,261          | 221           | 780            |
| *前年比(%) | —          | —          | 99.1             | 95.1             | 100.1          | 91.0          | 108.0          |
| *構成比(%) | —          | —          | 17.1             | 74.5             | 5.2            | 1.5           | 1.7            |

(注) 1.用途別200L缶、ペール缶の下限( )は前年比。 2.\*前年比ならびに、\*構成比は、トン数ベース。  
3.亜鉛鉄板缶、ステンレス缶は、200Lドラムおよび中小型缶を含む。 4.総本数は、33,337,390本。表上数値は四捨五入による差異がある。

(単位：千本)

| 缶種     | 2008年  | 2009年  | 2010年  | 2011年  | 2012年  | 2013年  | 2014年  | 2015年  | 2016年  | 2017年  | 2018年  | 2019年  |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 200L缶  | 15,019 | 11,731 | 14,311 | 14,041 | 13,206 | 13,165 | 13,717 | 13,579 | 13,587 | 14,101 | 14,134 | 13,606 |
| ペール缶   | 21,808 | 18,365 | 20,377 | 19,744 | 19,174 | 19,286 | 19,188 | 18,935 | 19,177 | 19,681 | 19,528 | 18,776 |
| 中小型缶   | 872    | 637    | 776    | 737    | 626    | 539    | 484    | 479    | 420    | 416    | 493    | 504    |
| 亜鉛鉄板缶  | 459    | 384    | 381    | 389    | 373    | 398    | 405    | 356    | 366    | 350    | 386    | 419    |
| ステンレス缶 | 37     | 33     | 34     | 38     | 35     | 33     | 37     | 30     | 40     | 34     | 39     | 33     |
| 合計     | 38,196 | 31,150 | 35,879 | 34,949 | 33,413 | 33,421 | 33,831 | 33,379 | 33,590 | 34,583 | 34,580 | 33,337 |

| 会員  |   | ドラム缶工業会   |
|---|---|---|
| <b>《正会員》</b><br>● 斎藤ドラム罐工業(株)<br>● JFEコンテナ(株)<br>● (株)ジャパンペール<br>● 新邦工業(株)<br>● ダイカン(株)<br>● (株)東京ドラム罐製作所<br>● 東邦シートフレーム(株) | ● (株)長尾製作所<br>● 日鉄ドラム(株)<br>● (株)前田製作所<br>● (株)山本工作所<br><br><b>《準会員》</b><br>● 森島金属工業(株) | <b>《賛助会員》</b><br>● エノモト工業(株)<br>● (株)大和鉄工所<br>● 三喜プレス工業(株)<br>● (株)城内製作所<br>● 東邦工板(株)<br>● (株)水上工作所           |
|   |   | 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10<br>(鉄鋼会館6階)<br>TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969<br>e-mail: drum.pail@jsda.gr.jp |
|   |   | <b>URL: <a href="http://www.jsda.gr.jp/">http://www.jsda.gr.jp/</a></b>                                       |
|   |   | ひびきNo.80(2020年2月6日発行)<br>発行人 ドラム缶工業会<br>常務理事 事務局長 坂元 信之   |

無断での複製、転載はお断りいたします。詳細はお問い合わせください。  
本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。